

(公印省略)

13病防第14号の4
平成13年8月1日

各関係機関の長 殿

福岡県病虫害防除所長

平成13年度病虫害発生予察情報について(送付)

このことについて、病虫害発生予報第5号(8月)を発表したので送付します。

平成13年度病虫害発生予報第5号(8月)
主要病虫害の発生現況及び予報の概要

【普通作物】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
普通期水稻	葉いもち 穂いもち 紋枯病 セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	やや多 - 並 やや少 やや少 やや少 並	並 並 やや多 やや少 やや少 やや少 やや多
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	並

斑点米カメムシ類については、前年対比。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 葉いもち・穂いもち

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査の結果、発病株率は11.74% (平年：6.53%、前年：2.72%)、発生ほ場率は40.98% (平年：28.27%、前年：10.94%)であった。

イ 気象予報では8月の平均気温は平年より高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉いもちの発生が多いほ場では、早急に防除を行う。

イ 穂いもちに対する粉剤や液剤の防除適期は出穂直前である。上位葉に病斑が目立つほ場や常発地では、さらに2回目の防除を穂揃期に行う。

粒剤による防除を行う場合は、粉剤や液剤の防除適期より早いので散布時期が遅れないように注意する。

ウ 防除薬剤については「平成13年度普通作物病害虫防除基準」を参照する（以下の病害虫についても同様）。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査の結果、発病株率は2.39%（平年：1.36%、前年：0.80%）、発生ほ場率は29.51%（平年：19.10%、前年：20.00%）であった。

イ 気象予報では8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 粉剤を使用する場合、出穂2週間～10日前に防除を行う。

イ 粒剤を使用する場合、収穫前使用規制日数に抵触する薬剤があるので、薬剤の選定に注意し、農薬安全使用基準を遵守する。

3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬までの飛来量は平年より少なかった。主要飛来は6月5日、28～29日頃であった。

イ 7月5半旬の調査の結果、10株当たり成幼虫数は11.36頭（平年：38.88頭、前年：10.74頭）、発生ほ場率は72.13%（平年：67.68%、前年：70.77%）であった。

ウ 8月以降の増殖は、例年少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫を対象とした防除の必要はない。

イ 発生パターンは、別紙の「平成13年度飛来月日に基づくセジロウンカ発生予想パターン図」を参照する。

4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬までの飛来量は平年より少なかった。主要飛来は6月5日、28～29日頃であった。

イ 7月5半旬の調査の結果、10株当たり成幼虫数は0.11頭（平年：0.38頭、前年：0.11頭）、発生ほ場率は13.11%（平年：18.75%、前年：15.38%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除を行っていないほ場で要防除水準を超える場合は、早急に防除を行う。

イ 防除時期は、別紙の「平成13年度飛来月日に基づくトビイロウンカ発生予想パターン図」を参照する。

5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

7月5半旬の調査の結果、食害株率は1.03%（平年：6.72%、前年：1.65%）、発生ほ場率は29.51%（平年：62.00%、前年：23.08%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤散布は防除効果の高い発蛾最盛期から1週間後の若齢幼虫期に実施する。

イ 防除時期は、別紙の「平成13年度飛来月日に基づくコブノメイガ発生予想パターン図」を参照する。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の片振り20回すくい取り調査の結果、クモヘリカメムシ・ホソハリカメムシ・シラホシカメムシの3種は畦畔で0.73頭（前年：1.68頭）、雑草地で3.21頭（前年：3.58頭）であった。アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメのカスミカメ類は畦畔で8.09頭（前年：6.13頭）、雑草地で24.38頭（前年：20.95頭）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂以降の畦畔や休耕田の除草は、カメムシ類の本田への飛び込みを助長するので、出穂以前に早めの除草を行う。

イ 防除適期は穂揃期とその7～10日後である。

ウ 水田周辺にイネ科植物が多いほ場や例年斑点米の発生が多い地域では、2回防除を徹底する。

エ 薬剤防除を行う場合は、水田周辺の畦畔などカメムシ類の発生源も含めた防除を行うとより効果が高い。

【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期：平年よりやや遅く、前年より遅い

発生量：平年並、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市のフェロモントラップによる7月1～5半旬の誘殺虫数は150頭（平年：236.9頭、前年：349頭）であった（図1参照）。

イ 筑後市のフェロモントラップによる7月1～5半旬の誘殺虫数は、筑紫野市と同様に平年よりやや少なく、新吉富村は平年並であった。

ウ 7月上～中旬の降雨によりほとんどのほ場で播種時期が遅れ、出芽は7月6半旬となった。

エ 気象予報では、8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉を認めた場合は直ちに除去する。
- イ 薬剤散布は防除効果の高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 各地域に設置されているフェロモントラップによる誘殺虫数を利用する場合は、誘殺ピークから2週間目が防除適期となる。
- エ ただし、栽培面積の拡大等で防除に要する期間が長くなる場合には、防除適期が過ぎて中老齢幼虫期になり、防除効果が劣ることになるので、誘殺ピークから10日目頃から早めに防除を開始する。

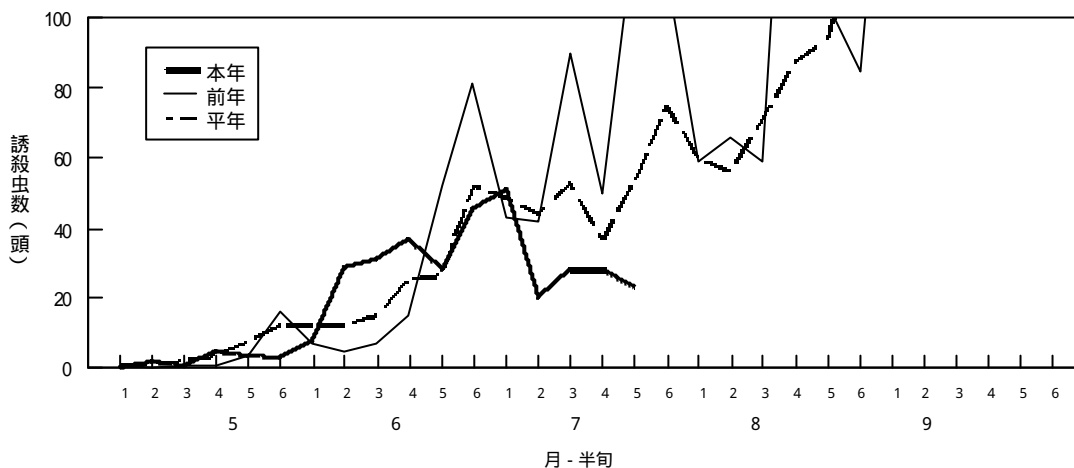
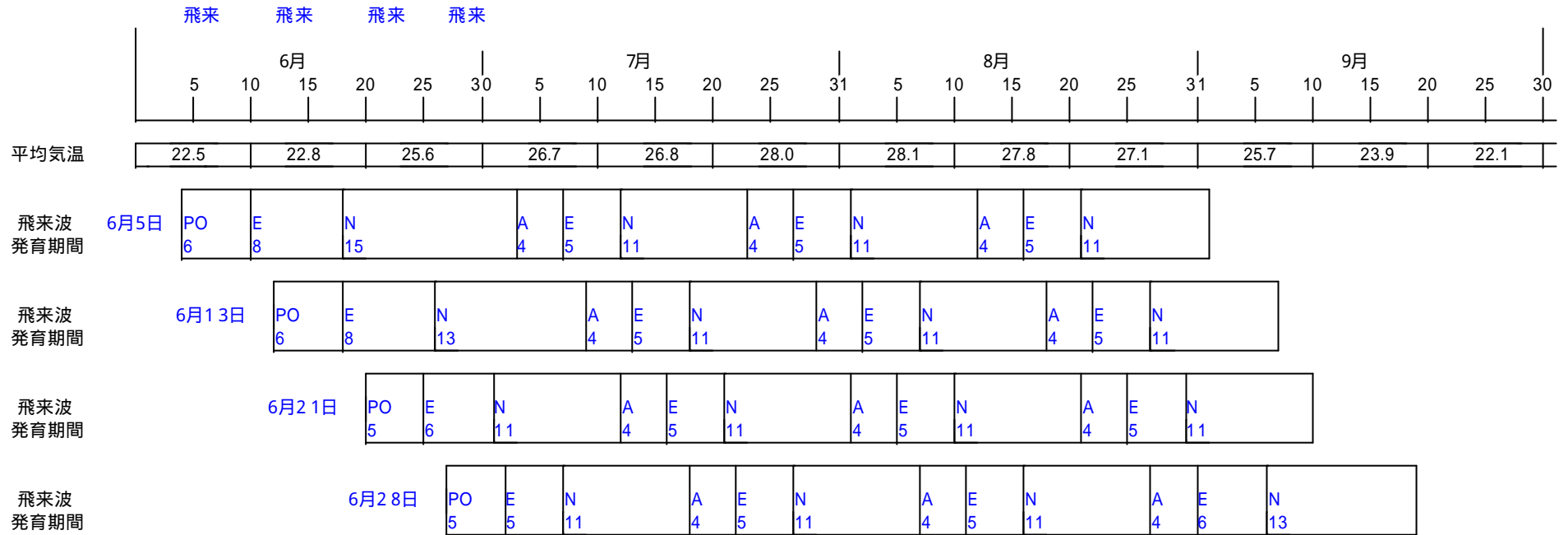


図1 ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数の推移 (筑紫野市)

別紙

平成13年度 飛来月日に基づくセジロウンカ発生予想パターン図

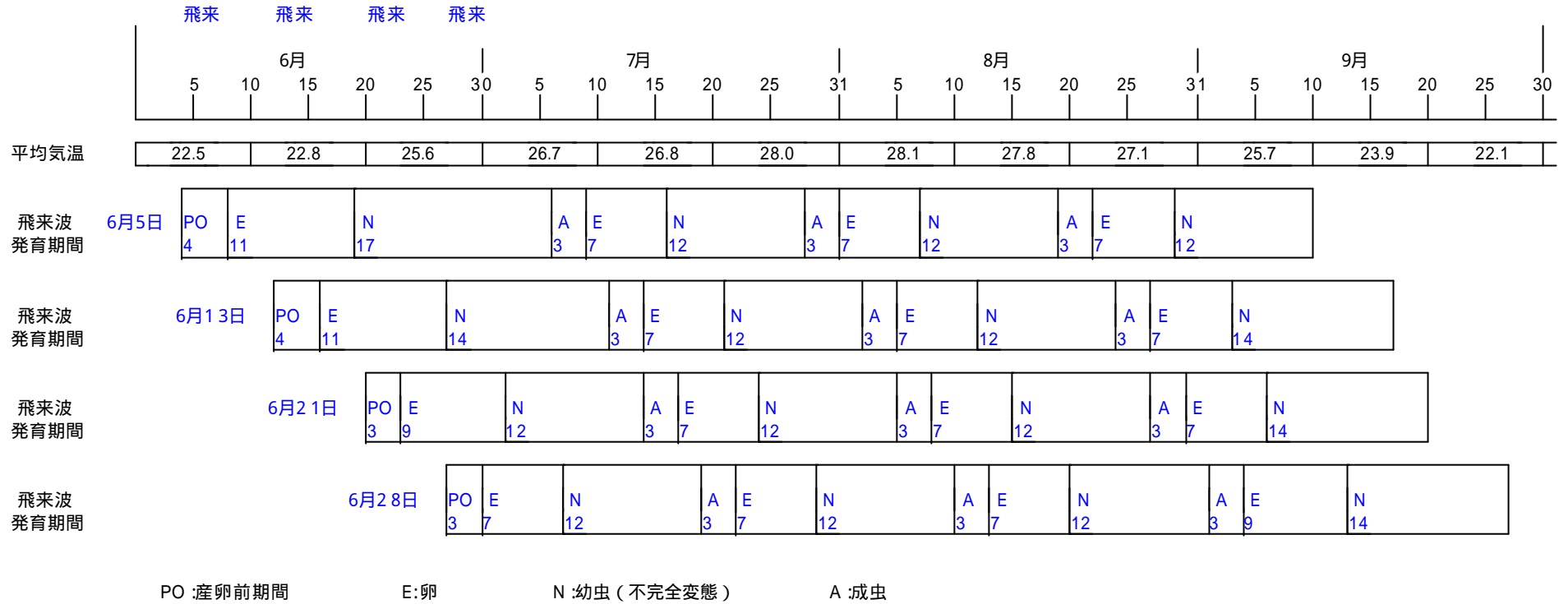


PO :産卵前期間 E:卵 N :幼虫 (不完全変態) A :成虫

平均気温は、福岡管区気象台福岡県農業気象速報の福岡観測所の数値。
 平均気温は7月中旬まで本年の数値で、7月下旬以降は平年の数値。

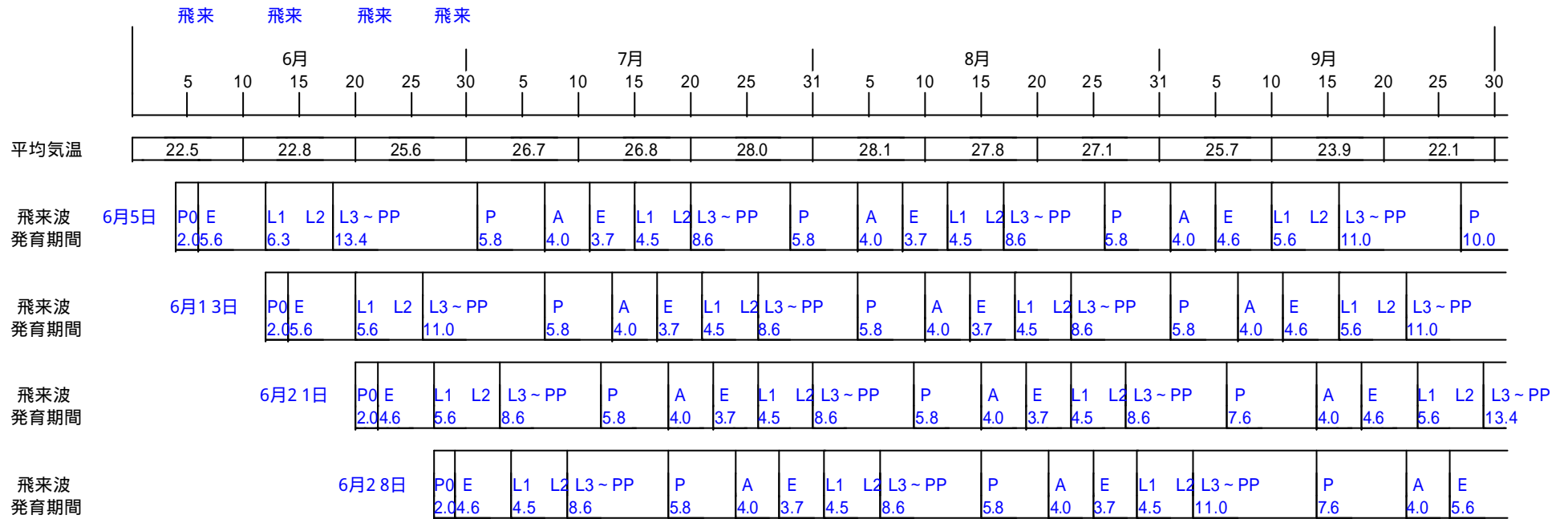
別紙

平成13年度 飛来月日に基づくトビイロウンカ発生予想パターン図



平均気温は、福岡管区気象台福岡県農業気象速報の福岡観測所の数値。
 平均気温は7月中旬まで本年の数値で、7月下旬以降は平年の数値。

平成13年度 飛来月日に基づくコブノメイガ発生予想パターン図



PO :産卵前期間 E :卵 L : 幼虫 (完全変態) PP :前蛹 P :蛹 A :成虫

平均気温は、福岡管区気象台福岡県農業気象速報の福岡観測所の数値。
 平均気温は7月中旬まで本年の数値で、7月下旬以降は平年の数値。

【果 樹】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	並 並	並 並
ナシ	ナシヒメシンクイ ハダニ類	並 やや多い	並 やや多い
カキ	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少ない 並 並 並	やや少ない 並 やや多い 並
ナシ、カキ カンキツ類等	カメムシ類	少ない	少ない

【果 樹】

1 カンキツの黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、発病果率は平均6.1%（平年：2.2%、前年：2.5%）、発生ほ場率は平均33.3%（平年：31.6%、前年：47.4%）であった。

イ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝を極力除去する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mm毎に薬剤散布を行う。

2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では寄生葉率は平均14.5%（平年：11.1%、前年：14.5%）、発生ほ場率は61.1%（平年：49.1%、前年：57.9%）であった。

イ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除にあたっては、雌成虫の寄生葉率が30～40%を目安とし、葉裏にも十分薬液がかかるように丁寧に散布する。

ウ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

3 ナシのナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年並

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる第2世代成虫の発蛾最盛期は、平坦地域で6月6半旬～7月1半旬、山間地域で7月1～3半旬頃であり、平年並であった。

イ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で7月5～6半旬、山間地域で8月1～2半旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期に7～10日間隔で2～3回防除する。

イ 幼虫は主として果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に十分薬液がかかるように散布する。

4 ナシのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査の結果、寄生葉率は平均15.3%（平年：10.6%、前年：20.1%）、発生ほ場率は75.0%（平年：43.8%、前年：68.8%）であった。

イ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除にあたっては、薬液が葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

5 カキの炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、発病枝率は平均1.1%（平年：3.0%、前年：0.7%）、発生ほ場率は平均13.3%（平年：36.3%、前年：20.0%）、発病果率は平均1.4%（平年：0.9%、前年：0.4%）、発病ほ場率は平均13.3%（平年：33.0%、前年：26.7%）であった。

イ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹冠内部の徒長枝に感染し、発病しやすいので、防除にあたっては薬液が樹冠内部にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので極力除去する。

6 カキのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では、発病葉率は平均6.7%（平年：11.1%、前年：5.9%）、発病ほ場率は66.7%（平年：77.1%、前年：66.7%）であった。

イ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

葉裏にも十分薬剤がかかるよう丁寧に散布する。

7 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬の調査では寄生果率は平均3.1%（平年：4.4%、前年：6.3%）、発生ほ場率は平均80.0%（平年：35.9%、前年：60.0%）であった。

イ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多いほ場では、第2世代幼虫の発生時期である8月上中旬の防除を徹底する。

イ 本種は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などの薬剤がかかり難い箇所によく寄生しているので、十分な薬量を使って散布むらのないよう

に防除する。

8 ナシ、カキ、カンキツ類等のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市吉木の予察灯におけるチャバネアオカメムシの7月5半旬までの累計誘殺数は、50頭（平年：5,697頭、前年：11,769頭）で、ツヤアオカメムシの誘殺数は27頭（平年：1,028頭、前年：2,460頭）と少なかった。

イ 筑紫野市吉木の集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの7月5半旬までの累計誘殺数は、158頭（前年：11,826頭）で、ツヤアオカメムシの誘殺数は12頭（前年：86頭）と少なかった。

ウ 7月5半旬のヒノキ球果のピーティング調査では、主要3種（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）の寄生頭数は、1地点当たり3.1頭（前年9.6頭、平年8.1頭）と少なかった。

エ 7月下旬のヒノキ球果における1果当たり口針鞘数は、病害虫防除所が調査した県内13カ所の平均が0.1本、福岡農総試では、3カ所（浮羽町、吉井町、田主丸町）の平均が0.2本と少なかった。

オ 7月下旬のヒノキ球果の口針鞘数を基にした予測では、8月末までは離脱しないと思われる。

カ 気象予報では、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 一般的なほ場では、カメムシ類を対象とした防除の必要はないが、例年被害が多いほ場では、今後の発生情報に注意するとともに、果樹園内の発生状況の把握に努め、発生状況に応じて防除を行う。
- イ 防除薬剤は、平成13年度果樹病虫害防除基準を参照し、農薬安全使用基準（収穫前使用規制日数等）を遵守する。
（平成13年7月30日付け果樹カメムシ速報を参照）

【茶】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
茶	炭疽病 もち病 輪斑病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	やや少ない やや少ない 並 やや少ない やや少ない やや少ない やや少ない	やや少ない やや少ない 並 やや少ない やや少ない やや少ない やや少ない

平年値（過去10年間の平均）がない場合は、前年までの平均値を用いた。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月4半旬の調査では、1 m²当たり病葉数は平均0.3葉（平年：5.8葉、前年：14.3葉）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1～2葉期までに薬剤防除を実施する。

イ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用しない。

ウ 防除薬剤は「平成13年度茶病虫害防除基準」を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める（この項は以下の病虫害についても同様）。

2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月4半旬の調査では、1 m²当たり病葉数は平均0.3葉（平年：0.4葉、前年0葉）であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉や茎の傷口から病原菌が感染するため、整枝後に薬剤防除を実施する。

イ 輪斑病が発生したほ場では、新梢枯死症の発生も多くなるので萌芽期及び2葉期に薬剤防除を実施する。

3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年・前年やや少ない

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる7月5半旬までの累計誘殺数は、筑後市では792頭（前7カ年平均：1,187頭、前年：1,100頭）であった。

イ 7月4半旬の調査では、1m²当り巻葉数は平均0.01葉（平年：0.4葉、前年：0.3葉）であった。

ウ 気象予報では、8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 巻葉後の防除効果は劣るため、巻葉がみられたら直ちに防除を行う。

イ 筑後市のフェロモントラップによる調査では、第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月6半旬～8月1半旬と予想されるので、ほ場内の成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後に防除を行う。

4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月4半旬のたたき落とし法による調査では、平均0.3頭（平年：0.8頭、前年：0.8頭）の発生であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

萌芽期から新葉展開期の防除が重要で、たたき落とし法（A4版白紙上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月4半旬のたたき落とし法による調査では、平均2.4頭（平年：4.8頭、前年：2.2頭）の発生であった。

イ 気象予報では、8月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

萌芽期から新葉展開期の防除が重要で、たたき落とし法（A4版白紙上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。

【野菜】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
ナス (露地)	うどんこ病 綿疫病 ミナミキイロアザミウマ アブラムシ類 ハダニ類	並 並 並 並 多い	並 並 並 並 多い
イチゴ (育苗床)	炭疽病 ハダニ類	やや多い やや多い	やや多い やや多い
アスパラガス	斑点病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類 ヨトウ・タバコガ類	少ない やや多い 少ない 並 並	少ない やや多い 少ない 並 並
ネギ (露地)	シロイチモジヨトウ*	並	並

- ・ 平年値 (過去 10 年間の平均) が ない場合は、前年までの平均値を用いた。
- ・ * はフェロモントラップによる誘殺頭数である。
- ・ アスパラガスは、前年より調査のため、前年値との比較である。

【野菜】

1 露地ナスの綿疫病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7 月 5 半旬調査の結果、発病果率は平均 0 . 1 % (平年：0 . 6 %、前年：0 %) であった。

イ 気象予報では、8 月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 不要な下葉を除去すると共に適宜、整枝、せん定をして通風、採光をよくする。

イ 降雨時の土砂の跳ね上がり等で多発することがあるので、発生状況に十分注意し、初期防除を徹底する。

ウ 窒素肥料の多用を避け、適正な施肥を行う。

エ 薬剤防除については県野菜病虫害防除基準を参照する。農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める (以下の病虫害についても同様) 。

2 露地ナスのハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年、前年より多い

(2) 予報の根拠

平成 13 年 7 月 30 日付け：速報第 4 号を参照のこと

3 イチゴの炭疽病

(*Colletotrichum acutatum* 菌による葉枯れ炭疽及び *Glomerella cingulata* 菌による炭疽病)

(1) 予報の内容

発生量：前 8 カ年平均よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7 月 5 半旬調査の結果、子株での発病株率は平均 1 . 0 % (前 8 カ年平均：0 . 1 %、前年：0 . 8 %) であった。

イ 気象予報では、8 月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、早めに除去する。

イ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後や下葉かき後の防除を徹底する。

ウ 葉枯れ炭疽については、輪斑病など類似の病徴を示すものがあり、病徴だけで判断がつかない場合は地域農業改良普及センタ - や当所へ同定を依頼し、病害の種類を特定する。

エ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

4 アスパラガスの斑点病

(1) 予報の内容

発生量：前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 7 月 5 半旬調査の結果、発病株率は平均 1 1 . 1 % (前年：5 5 %) であった。

イ 気象予報では、8 月の平均気温は平年より高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 過繁茂になると多発するので、整枝を的確に行いほ場内の通風をよくする。

イ 発病部位はできる限り取り除き、薬剤による防除を徹底する。

5 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 7 月 5 半旬調査の結果、寄生株率は平均 4 1 . 7 % (前年：3 5 . 8 %) であった。

イ 気象予報では、8 月の平均気温は平年より高いと予想されている。

6 ネギのシロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 朝倉町 (2 ヶ所) および行橋市の 7 月 2 半旬 ~ 5 半旬のフェロモントラップによる誘殺頭数は平均 7 5 . 7 頭 (平年：8 9 . 2 頭、前年：1 8 6 . 7 頭) であった。

イ 気象予報では、8 月の平均気温は平年より高く、降水量は平年並と予想さ

れている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫はそのまま葉身内に食入し、内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉は見つけ次第直ちに除去する。

イ 中齢以降の幼虫に対しては薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、薬剤防除は卵期から孵化幼虫期に食入防止をねらって行う。